昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和7年1月1日発行 第49巻第1号通巻第568号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

月刊みんぱく

1月号
2025

特集

「お供え」する?

巻頭エッセイ 野村 進

湧水あふれる島

野村進（のむらすすむ）
ノンフィクションライター
拓殖大学国際学部 教授

南の島に着くと、かならず体に変化が起きる。

なに、たいしたことではない。肩や背中のこわばりが、ゆるゆるとほどけていく気がするのだ。

東京で知らず知らずのうちに、身構えて生きているのかもしれない。最近訪ねた奄美群島の沖永良部島でも、小型機から降り立つとすぐ、全身に心地よい脱力感が広がった。

沖永良部島には、かつての教え子と、知り合ってまもない同世代の知人がいる。ふたりにまず会いたいと思った。それから、南国の植生が大好きなので、南の森をゆっくりと散策したかった。

周知のとおり、南西諸島のほとんどの島には、猛毒を持つハブがいる。私は、南の鬱蒼たる森林で、人間より上位に位置するハブに畏敬の念を抱いてきたが、毒蛇におびえながら森を歩きたくはない。沖永良部は太古の海没と隆起によって、南西諸島では珍しくハブが生息していない島なのである。

この島で私は南の森を久々に堪能したのだが、新鮮な驚きを感じたのは人々の暮らしぶりだった。

いたるところに水場がある。近所の人々が湧水で野菜を洗ったり、子どもたちがプール代わりに水遊びをしたりしている。むかしは沐浴場でもあったそうだ。端のほうには役牛に水浴びをさせてやった場所もあり、手綱をつなぎとめた跡が残っている。

島は地下水に恵まれ、鍾乳洞は世界でも屈指の美しさを誇る。地下にある水場も多く、「暗川（クラゴー）」と呼ばれている。

水場は、いまも地元の社交場だ。お年寄りたちが、私には聞き取れない方言で談笑している。そばでは子どもらが水を掛けあい、歓声をあげている。小さな滝がある水源には、控えめな虹がかかったりした。

私は、バリ島かどこかの水場にいるような気がしてきた。不思議なことに、「懐かしさ」と「新しさ」の両方を感じていた。

島には、北と南に小さな街がある。ふたつの街を中心にして、北側には薩摩の文化が、南側には琉球の文化がそれぞれ根づき、人々の気質も微妙に異なるという。

島で働くフィリピン人女性数人にも出会った。タガログ語で話しかけると、みなニコニコ顔になった。

私は、これから何度も、この島に通いそうな予感がする。

沖永良部島・瀬利覚（せりかく）の水場
（鹿児島県、2023年、神川亜弓さん撮影）

プロフィール
1956年東京都生まれ。78～80年、フィリピンに留学。主著に『コリアン世界の旅』（大宅壮一ノンフィクション賞、講談社ノンフィクション賞）、『アジア 新しい物語』（アジア・太平洋賞）、『日本領サイパン島の一万日』、『千年、働いてきました』など。最新刊は『丹波哲郎 見事な生涯』（講談社）。

月刊みんぱく
2024年12月号

表紙
人間の首の代わりに、人物をあらわした土偶や土器から頭部のみを取ってお供えすることもあったようだ
（ペルー アヤクチョ、2022年、ユリ・カベロ撮影）

＊本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1 巻頭エッセイ
湧水あふれる島
野村 進

特集「お供え」する人

2 **「お供え」ってなんだろう？**
松本 雄一

4 **シュエダゴン・パゴダ、金色の輝き**
藏本 龍介

6 **村でアカの家族が供犠をやめたのは**
清水 郁郎

8 **「無形の供物」としての芸能**
神野 知恵

8 **「死んだら無になる」？**
金 セッピョル

10 **生け贄の缶詰**
足立 真理

11 **お供えの誕生**
池谷 和信

12 みんぱく回覧板

14 推しコレ図鑑
鳥の女
木場 貴俊

16 ふらりミュージアム
ヨコタ博物館
中村 真里絵

17 世界の「乗っちゃえ！」
自転車が刻むケニアのリズム
萩原 卓也

18 だって調査だもの
ユニフォーム効果
稲澤 努

20 ぱくっ！とフィルめし
行く国々で「肝だメシ」
キャサリン・バトラー

21 今月号の地図・編集後記

特集

「お供え」する人

神社でも、お寺でも、家庭でも
正月に「お供え」はあたりまえ
でも、なぜ？　そもそも人はお供えを
いつ始めたのだろう？
そして、なぜなくならないのだろう？
信心とは別のところから
お供えの現実が見えてくる……

正月棚（愛媛県、H0037023、日本の文化展示）
新しい箕（み）にシダをしき、お盆を置く。餅、ミカン、串柿、田作り、お神酒、ご飯、味噌汁、箸、ロウソクをふたつずつのせる。これを恵方の方向に天井から吊るす

「お供え」ってなんだろう？

松本雄一（まつもとゆういち）　民博 准教授

「何か」に願いを

みなさんは正月のお供えひとつひとつの意味をご存じだろうか。

なにが正解かはさておき、それぞれをちゃんと答えられる人は少ないだろう。意味なんてことは考えず、慣習として続けているのがふつうなのだ。

それにしても「お供え」ってなんだろう。本来、目に見えない、あるいは不在の「何か」に対して捧げられるモノのことだ。言い方を変えれば、お供えはその「何か」に、願いや思いを伝えてくれるメディアである。しかし続けているうちに、いつしかそこに込められる願いや思いが忘れられたり、また「何か」もあいまいになったりしていることがある。そうなっても、なぜなくならない「お供え」がたくさんあるのだろう。もしかすると、ただの慣習に堕したお供えの事例のなかに、それをし続けているわれわれ自身を探ることができるかもしれない。

紀元前2800年ころの儀礼場から、丁寧に掘り込まれた土坑が確認され、その中には頭蓋骨が2つ並んで納められていた。これもお供えと解釈できるかもしれない
（ペルー アヤクチョ、2013年）

左：石のお供え？ 3000年前のアンデス高地の神殿で確認された遺構。赤い石が丁寧に掘られた穴の中におさめられている。筆者はお供え（奉納物）と解釈したが、何かに使ったあまりの石を埋めただけ、なんて可能性も……

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

われ側の事情、いわば「ホンネ」が隠れているのかもしれない。例えば仏壇へのお供えを買うとき、価格であったり、「御下がり」を食べる家族の人数や好みだったりを考えたりしないだろうか。

ホントに聖なるお供え？

筆者はアンデス考古学を専門としており、今から三〇〇〇年前に栄えた神殿で発掘調査をおこなっている。神殿からはさまざまな捧げもの、すなわちお供えが出土する。動物の骨からわざと壊された土器、人間の頭骨、遠くから運ばれてきた希少な石までその様態はさまざまである。豊かな装飾品を身に着けた人物の埋葬とて、神殿においてはお供えとみなすことも可能であろう。

しかしあるときふと感じた。われわれ考古学者はこれらのお供えに過剰に意味を付与しすぎてはいないだろうか、古代の人びとをあまりに敬虔（けいけん）な宗教人として描きすぎてはいないだろうか。古代アンデスの神殿では、あらたな神殿を建造する際に劇場型の儀礼と宴会がおこなわれたことが知られている。幻覚剤を用いて華やかな装身具を身にまとった神官が中心となり、多くの聴衆が広場に集まる重要なイベントであったと考えられる。

そして筆者の調査では、このイベントで使われた食器や道具があらたな神殿に埋め込まれていたことが分かったのだ。「そこで、聖なる儀礼で用いたものを奉納物（お供え）として神殿の一部とすることに意味があった」という解釈を論文では提示したのだが、よく考えると「片づけるのが面倒だから、お供えということにして埋めちゃった」なんてのがホンネだったりしないだろうか。ちょっと怖くなってきた。考古学ではそういうことは言わないのが暗黙の了解のようなものだ。実際に古代人によるお供えの現場を観察することはできないし、古代人にホンネを聞いて確認することもできない。

ホンネを探ってみよう

また現代に戻ってきて、わたしたちの身の回りのお供えについて考えてみよう。いったいどのようなお供えが、どのように形を変え生き延びている、あるいは新しく生まれているのだろうか。近年の社会におけるデジタル化の波が、お供えという行為にどのような影響を与えているかも気になるところである。現代において「何か」に「捧げる」というお供え本来の意味はどのように変化したのか。そして、それはホンネとどんな関係にあるのか。

こう考えてみると、「お供え」のホンネを探ることは、その行為を続けるわれわれ自身を探ること。「タテマエ」としてのお供えの意味よりも、それを実践する人の生き方の意味を知ることである。各地の社会に密着し、聞き取りと行為の分析のどちらも扱っている人類学者たちの声に耳を傾けてみよう。

チャビン・デ・ワンタル遺跡。中央アンデスにおいて紀元前1000～500年ころに巡礼地として栄えた神殿。遠隔地から人びとは奉納物（お供え）をもって訪れた
（ペルー、2019年、ジェイソン・ネスビット撮影）

シュエダゴン・パゴダ、金色の輝き

藏本龍介（くらもとりょうすけ）
東京大学 准教授

上：シュエダゴン・パゴダの輝き（2020年）（写真はすべてミャンマー ヤンゴン）

ミャンマーの国家予算の数十年分

ミャンマー最大の聖地であるシュエダゴン・パゴダは、金色に輝いている。その頂点には七六カラットのダイヤモンドを筆頭に、数千個の宝石（ダイヤモンド、ルビー、サファイアなど）が埋め込まれている。一説によると、シュエダゴン・パゴダにはミャンマーの国家予算の数十年分を賄えるだけの財が結集している。これはすべて一般の仏教徒からの布施によるものである。

ミャンマー仏教の世界では、「お供え」は布施という形であらわれる。人生儀礼（誕生、結婚、死去など）や年中儀礼（新年、雨安居前後など）、厄除け・願掛けなど、ありとあらゆる機会にパゴダ（仏塔）や出家者に布施をする。年収を上回る額を布施することもめずらしくない。

布施への熱意

なぜミャンマー仏教徒はこれほどまでに布施に熱心なのだろうか。その背景にあるのは「輪廻転生」「業」「功徳」といった仏教的な世界観である。仏教徒の実践の要は、善行によって功徳を積み、自分の業を善くすること、それによって輪廻転生のなかで良い生まれ変わりを果たすことにある。そして善行のなかでももっとも一般的なものが布施、つまり自分のもっているヒト（労力）・モノ・カネを、他者に提供するという行為である。大切な何かを手放すことは、同時に自分の心を執着や欲望から解き放つことになる。こうした執着から離れた心の状態を功徳といい、この功徳が善業（善因）となり善果（良い転生や悟り）をもたらすとされる。

ただし実際の布施の動機は多様である。例えば『パーリ仏典』（経蔵・増支部）の記述では、仏法僧への尊敬、返礼（功徳）の期待、自分の名声の上昇、他人からの非難の回避といった動機が挙げられている。あるいは特に強い動機がなく、なかば慣習的におこなわれている側面もある。その一方で、熱心に布施をしている人たちはじつに生き生きしている。その姿を見ると、人間は「もらうこと」よりも「与えること」の方が好きなのではないかという気がしてくる。自分のもっている資源を通じて他者に貢献すること。そこにわたしたちの大きな喜びがあるのだろう。

僧院での布施儀礼の様子（2008年）

功徳一〇倍のすすめ

仏教徒の布施はこれまで、仏法僧に集中する傾向にあった。仏法僧こそが、布施をもっとも功徳ある善行へと変えてくれる存在（実り多い福田）であるとされてきたからである。しかし二〇〇〇年代以降、布施の流れは仏法僧から社会的弱者（障害者、老人、病人、子ども、被災者など）へと広がりつつある。例えば葬式支援協会では、貧しい人びとの葬儀を手助けすることが、僧院に布施するよりも一〇倍の功徳があることを喧伝し、昨今の福祉（パラヒタ）ブームを牽引している。

二〇二一年の国軍によるクーデター以降も、草の根レベルの布施ネットワークが市民の生活を支えている。仏法僧を核として培われてきた布施の循環（布施経済制度）は、形を変えながらミャンマー社会の基礎となっている。

右：パゴダでの布施の様子。お金を投げて入れば願いが叶う（2007年）
左：洪水被災地への支援物資を準備する葬式支援協会の人びと（2020年）

村でアカの家族が供犠をやめたのは

清水郁郎　芝浦工業大学 教授

とにかく多い供犠

北タイの山地に住むアカの村で調査をしていた一九九七年当時、村の人びとにとって、年に一二回の祖先祭祀は単に祖先を敬うだけでなく、農耕や狩猟などの生業の過程とかかわる重要な機会でもあった。祭祀祭礼には必ず動物の供犠が伴う。動物を殺して祖先の霊にお供えするのである。

村の全世帯で新米の収穫が終わって一カ月半から二カ月ほど後におこなわれる新年の祭ガタン。その初日「水牛の日」には、各世帯で祖先祭祀がおこなわれた。この祭を過ぎると「村や家にいる時間」すなわち農閑期がはじまり、家の改修や新築、結婚式が頻繁におこなわれるようになる。それからほぼ二カ月後には、狩猟で獲物がたくさん獲れるように願うフンムシュイの祭があり、その初日には、やはり、各世帯で祖先祭祀がおこなわれるという具合である。

供犠される動物

祖先祭祀や祭礼ばかりでなく、アカの村ではほぼ毎日、どこかの家で病気治療や厄払いがおこなわれていた。動物が供犠され、病気治療であれば病気を治す託宣を与えてくれる祖霊に捧げられた。厄払いであれば、人に取り憑いた精霊に人間の魂を取る代わりに動物を持っていくよう交渉がおこなわれた。

供犠される動物は、その体毛の色や雌雄、ニワトリであれば成鳥か幼鳥かなどが儀礼ごとに決められている。稲の播種前に必要な「水場を清める儀礼」では、ニワトリは羽毛が茶色の「清浄なニワトリ」で、雌雄一対であることが必須である。稲の播種の初日におこなわれる祖先祭祀では、ニワトリは雄でも雌でもよいが幼鳥が必要である。村全体が災厄にみまわれたときにおこなわれる大掛かりな厄払いでは、雄の白いニワトリ、雌の茶色いニワトリ、雌の黒いニワトリ、茶色のイヌに加えて、若い雄のヤギと雄のブタ各一頭が供犠される。三羽のニワトリはいずれも幼鳥でなければならない。

徐々にブタが小さくなって……、そして改宗へ

ニワトリからスイギュウまで、供犠される動物は、儀礼や役職によってはたいへんな数である。その負担は世帯に重くのしかかる。村の儀礼的指導者の男性は、自らが主催する儀礼を年に三回おこなわなければならない。当日の朝にブタを一頭供犠し、儀礼後に老人たちを自宅に招いて酒食をふるまう習慣であった。

わたしが調査していた村で儀礼の指導者だった男性の場合、当時一〇歳ほどの長女を筆頭に数人の幼児を抱えていた。この男性のように比較的若い夫婦と数人の幼児だけの世帯は、労働の担い手が少ないために経済的に苦しいことが多々ある。供犠するブタは徐々に小さくなり、ついには子ブタを供犠するに至った。五〇〇バーツ前後（日本円で約一六〇〇円）で購入したものだが、男性には大勢の老人たちをもてなすに足る三〇〇〇バーツ（約九六〇〇円）前後の中型のブタを購入する資金力はすでになかった。

では最終的にどうなるのか。多くの世帯が動物供犠を必要としないキリスト教などに改宗するのである。北タイの山地では、一九六〇年ころからキリスト教の関係団体が活発に布教活動をしていたが、山地民のキリスト教への改宗理由は、このようにしばしば伝統を維持するための経済負担が大きいことだった。

ところでアカの人びとは、加護や病気治療を期待してきた。よくない霊に対しては、供物は人間の命と引き換えるためだった。葬式では、供犠されたスイギュウは冥界への旅をする死者の旅の途上の食物だった。改宗とは、単に信仰する対象を変えるというだけでなく、祖霊から悪霊までが存在するこうした世界そのものを捨てる（世界の見方を変える）ことである。キリスト教への改宗では祖先を祀る祭壇を家から捨てるが、それをした後の世界には、すでに恐ろしい霊も祖霊もいない。

今日、ほとんどのアカの村が祖先祭祀と精霊祭祀を捨てたが、今年八月に久しぶりにアカの村に行ったとき、少数の村では、一二回は無理だがいちばん大事な三回の祖先祭祀、すなわち新年の祭、大猟祈願、雨季の最中のブランコ祭をおこなっていると聞いた。そのとき、はたして動物は供犠されるのだろうか。次回現地に行くときに確かめてきたい。

人が亡くなると、その魂は祖先のいる冥界に旅する。まじない師はその長い道行を数晩かけて唱えて死者に教える。その道中の食物としてスイギュウが供犠される（1997年）（写真はすべてタイ チェンライ）

家に入ったよくない霊を追い出す儀礼では、霊の接近を感知できるイヌが供犠される（1998年）

観光向けのブランコ祭の告知。稲の豊作を祈るブランコ祭では、雨期の最中に巨大なブランコに女性が乗り、空に向かって高くこぐ。祖先祭祀を伴う儀礼だが、現在では観光客向けにおこなわれることが多い（2024年）

「無形の供物」としての芸能

神野知恵（かみのちえ）　岩手大学 准教授

浦浜念仏剣舞。地域の人びとが待っているので、雨でも剣舞を中止することはない（岩手県 大船渡市 三陸町越喜来浦浜、2018年）

死者を弔う「念仏剣舞」

現代日本で、目に見えない存在に芸能を「捧（ささ）げる」文化が色濃く残っているのは、死者供養の芸能だろう。東北地方では、今も盆の時期に家々を訪ねて演じられる芸能が数多く見られる。

岩手県大船渡市越喜来浦浜（おおふなとしおきらいうらはま）の「念仏剣舞（ねんぶつけんばい）」は、盆の時期にその年に亡くなった人を悼むため、家を訪ねて庭先で踊る。この踊りに焼香の動作が取り入れられている点が特徴的だ。踊り手は軒先に用意された位牌（いはい）と遺影の前で実際に焼香をおこなう。抹香の香りは仏の食べ物とされ、死者や仏に極楽浄土を思わせる良い香りを捧げると同時に、参拝者自身を清める意味があるという。

黒い翁面（おきなめん）をかぶった「ササラ」とよばれる踊り手が香炉を高く掲げ、他の踊り手たちの前に進み出る。その周りでは、鬼面をつけた踊り手たちが扇をゆっくりと動かして煙の揺らぎに呼応する。一人ひとりが立ち上がり、頭を垂れて焼香する動作が踊りの一部となっている。これこそ、死者に捧げる「無形の供物」としての芸能の姿だ。

飛び込みのじゃんがらお断り？

福島県いわき市には「じゃんがら念仏踊（ねんぶつおどり）」がある。浴衣姿のたくましい青年たちが太鼓や鉦（かね）を打ち鳴らしながら、地域の初盆の家を訪ね、念仏を唱え踊る芸能である。二〇二三年夏の馬場（ばば）青年会の盆供養では、初盆の家に親族一同が集まり、踊り手たちを迎える伝統が守られていた。迎える家族のなかに青年会のOBがいる場合も多く、喪服姿の人が踊り手に交ざって太鼓を叩（たた）く光景は、ともに故人を偲（しの）ぶ盆供養の本来の意味を示しているように感じられた。

じゃんがら念仏の盆供養。青年会OBがいる家では家族も一緒に踊った（福島県 いわき市 平下高久馬場、2023年）

一方で、ある家の玄関灯籠（とうろう）には「予約以外のじゃんがら団体はお断り」との貼り紙があった。じゃんがらでは、担い手が地区内の新盆の家と事前に連絡を取り合うのが基本だが、お布施による稼ぎを求めて他地域で飛び込み供養をおこなう例もあるという。以前、複数の団体が一度に押し寄せて混乱したことがあり、その対策として貼り紙がされたとのことだ。

弔いの芸能はだれのため

「念仏剣舞」や「じゃんがら念仏踊」をはじめ、供養の芸能の目的は亡き人の魂を慰めることだが、家々からいただくお布施が活動資金となっている現実もある。また、終わった後にメンバーで打ち上げをすることが、行事を支える重要な要素であることも否めない。猛暑のなか、供養を続けるには強いモチベーションが必要なのだ。

一方、迎える側も、亡き家族の冥福を祈るだけでなく、自身の心を癒すために芸能を迎え、手厚くもてなしてきた。しかし以前に比べ、お布施の負担や他人を家に呼ぶことに抵抗を感じる人が増えた。その結果、寺や墓地で奉納する形式に移行した芸能も多い。

芸能とは、人びとの願いが重層的に反映されて作られる文化である。形骸化や変化が進んでも、根底には人間の想いが残されている。特に死者供養のための芸能は、ホンネとタテマエが交錯しつつも、今も地域文化のなかに息づいているのである。

「死んだら無になる」？

金セッピョル（キム）　総合地球環境学研究所 客員助教

日本でもっとも身近なお供えといえば、やはり仏壇、つまり死者へのお供えであろう。

わたしは一九九〇年ころにあらわれた日本の自然葬（海、山などに散骨する葬法と儀礼）について研究してきた。お墓を作らずに自然葬をおこなう人たちのなかには、お墓だけでなく仏壇を中心とした死者儀礼にも懐疑的な人が多い。

Sさん（一九四三年生まれ、女性）もそのうちの一人であった。夫が長男だったため夫の家の墓と仏壇を継いだが、家制度的な死者祭祀（さいし）への反感や「死んだら無になる」という死生観から、二人は墓と仏壇は要らないと結論した。彼らは仏壇を解体して粗大ゴミに出した。

しかし夫が亡くなってからSさんが実際にとった行動は、「死んだら無になる」という考えとは矛盾するものであった。リビングの棚の上に、夫の遺影や一握りの遺灰を飾り、毎日のようにポテトチップスを供えるようになったのである。彼らは夕飯前に夫婦でポテトチップスをつまみながら好きなビールを飲む習慣があったという。

彼女は、本当に「死んだら無になる」と思っているのだろうか。もちろん、生前からの習慣を続けているだけという見方もあるだろう。ただ、「ポテトチップスは時間が経つとふにゃふにゃになるし、捨てるときは何しているんだろうと、嫌な気持ちになる」と語る彼女の表情は複雑そうに見えた。いざ大切な人を亡くしたとき、人はどのような行動をとるのだろうか。死者に何を供えるか、または供えないかという問題は、わたしたちに自らの死生観のホンネを突きつけてくる。

海への散骨後、飲み物を供えている（横須賀港、2010年）

空き地に繋がれた犠牲祭用のヤギたち（インドネシア、2017年）

生け贄の缶詰

足立真理（あだちまり）
立命館大学 日本学術振興会 特別研究員

イスラームでは犠牲祭の日に、神への供物として肉を捧げる「クルバーン」という習慣がある。旧約聖書のアブラハムが息子を神に捧げる説話が、クルアーン（コーラン）に登場することをご存じの方もいるだろう。その宗教的な祭日には盛大な祝宴を開き、家族や近隣の貧しい人びとと食物を分かち合う。

世界最大のムスリム人口を有するインドネシアでも、犠牲祭の日にはヤギやウシが捧げられる。わたしがいた町では、ウシより安価なヤギが多く、犠牲祭の一カ月ほど前から空き地に供物となるヤギが繋がれていた。当日には寮母さんがヤギの脚をスープにして振る舞ってくれた。香辛料を多用していたが、野性味のある匂いがし、命を頂いていることを実感する日だった。また、近くのモスクでは隣組や組合でお金を出し合い、ウシが供犠として用意されていた。神の御名を唱えられ屠殺される際のもの悲しい鳴き声は忘れられない。

近年、国内第二位のザカート（イスラームの喜捨）管理団体であるルマ・ザカートは、「缶詰のクルバーン」という、プログラムを提供している。自社農場で育てたウシを自社工場で缶詰化し、生け贄の代わりにするのである。このシステムの画期的な点は、クルバーン用の肉を缶詰化することで長期保存が可能となり、犠牲祭で分配された肉が計画的に消費できるようになったことだ。

寮で振舞われたヤギのスープ（インドネシア、2017年）

近代化と効率化により、犠牲祭の中身も変容している。都市部では屠殺できる場所が限られることから、近年ではお金だけ寄付するという形に変容している地域も多い。工場で解体され缶詰化された犠牲祭用の肉は、アッラーへの信仰を示しながら貧しい人びとへの分配を無駄にすることなく「最適化」できるといういい面もある。しかしながら、そこにはあのウシの鳴き声もなく、ヤギ特有の野性味のある香りもしない。「最適化」の名のもとに、命の大切さと向き合う行為、そして食べ物を一緒に分かち合うという慣習としての役割は形骸化していくのかもしれない。

ルマ・ザカートの缶詰クルバーン（インドネシア、2014年）

お供えの誕生

池谷和信（いけやかずのぶ）
民博 名誉教授

わたしはこれまで、世界中で狩猟採集を生業（なりわい）とする人びとの暮らしを見てきた。狩猟文化のなかでも、お供えする文化と、しない文化がある。

今から三〇年前、東北マタギのクマ猟に同行したときであった。マタギは集落周辺の里山から、山の神の領域である奥山へ入るときに祈りを捧（ささ）げる。クマの捕獲に成功し、解体するときには、山の神に感謝の祈りを捧げる。さらに集落での年に一度のクマ祭りでは、山の神にクマの毛皮などを供える。また、九州地方のイノシシ猟では、捕ったイノシシの頭骨を神に供えたり、大祭で多くのイノシシの頭が祭壇に並べられたりする。

一方で、アフリカのカラハリ砂漠に生きるサンの人びとの狩猟では、どうだろうか。現地にて何度も彼らの猟に同行したが、祈りや供物を捧げる場面を見たことがない。唯一、ダイカーなど小型のカモシカ類を狩る罠猟（わなりょう）で捕獲がうまくいかないときに、猟師がダイカーの毛皮を振って願ったぐらいである。彼らは、猟の成否を姿の見えない存在に依存しない現実主義者であるのだ。

人類は、いつからお供えをするようになったのか。おそらく遊動から定住へという生活様式の変化や、農耕の導入と関係しているのだろう。マタギの場合は、農耕をする定住社会における狩猟であり、彼らは集落の周辺部の里山と、山の神の領域である奥山を分けて認知している。奥山は山の神が支配する領域である。奥山での獲物は、山の神が慈悲で授けてくれたものという思いが生まれた。これが、マタギのお供えの誕生であったとわたしは考えている。

銀鏡（しろみ）神楽で祭壇にイノシシ頭を供える（宮崎県、上：2012年、下：2013年、鈴木良幸撮影）

みんぱく回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event/

各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

みんぱく映画会

みんぱくワールドシネマ
「セールス・ガールの考現学」

日時　2月24日(月・祝)13時30分～16時40分(12時30分受付・開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
上映作品　「セールス・ガールの考現学/The Sales Girl(2021年)
解説　島村一平(本館 教授)
司会　菅瀬晶子(本館 准教授)
参加費　要展示観覧券(イベント参加費は不要)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日12時30分から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場いただきます。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
1月10日(金)～17日(金)　定員70名
お申し込み先
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)

▼一般受付
1月20日(月)～2月19日(水)

《館外開催》
みんぱく映像民族誌シアター

本館制作オリジナルDVD「みんぱく映像民族誌」シリーズから、2つの収録作品を上映し、監修者によるトークをおこないます。
参加形式
会場参加　第七藝術劇場(大阪・十三)(各回定員90名)
※館外での開催です。
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料

「20世紀の証言　モンゴル―工業、牧畜、農業」

日時　2月2日(日)
14時30分～16時30分(14時開場)
解説　小長谷有紀(本館 名誉教授)
司会　黒田賢治(本館 助教)

【申込期間】
▼一般受付　1月29日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

「20世紀の証言 モンゴル―工業、牧畜、農業」より

ワークショップ

年末年始イベント
みんぱくで巳(み)～つけた！

ヘビの資料をさがしに展示場を巡ってみませんか。アンケートにご協力いただいた方にはオリジナル缶バッジを差し上げます(各日先着120名)。
日時　1月11日(土)、12日(日)
10時～16時30分(15時30分受付終了、配布予定数がなくなり次第終了)
受付場所　本館1階エントランスホール
会場　本館展示場
※当日随時受付、要展示観覧券(イベント参加費は不要)

「つながりを生きる 東京のエチオピア移民」より

「つながりを生きる 東京のエチオピア移民」

日時　2月11日(火・祝)
14時30分～16時30分(14時開場)
解説　川瀬慈(本館 教授)
司会　黒田賢治(本館 助教)
※「東京ドキュメンタリー映画祭2024」で人類学・民俗映像部門コンペティションにおいて入選しました。

【申込期間】
▼一般受付
1月6日(月)～2月5日(水)
※友の会先行受付は終了しました。

みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

ポストカードを作ろう！～みんぱくでさがす新年のラッキーシンボル～

日時　1月5日(日)10時30分～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

お正月や干支のお話を楽しもう

新年や干支にまつわる絵本の読み聞かせです。
日時　1月5日(日)
絵本の読み聞かせ①11時30分～11時50分、②13時～13時20分、③14時～14時20分、④15時～15時20分
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

点字体験ワークショップ

日時　1月11日(土)、2月8日(土)
12時～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

干支の動物で絵馬を作ろう

日時　1月13日(月・祝)10時30分～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

「西アフリカのお話し会」の公演

日時　1月13日(月・祝)①11時30分～12時、②13時30分～14時
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

みんぱく創設50周年記念 国際シンポジウム

22世紀のミュージアム―未来のコミュニケーション空間を創造する―

情報技術は、博物館でどのように活かされ、博物館をどのように活かしてくれるのか。時間と空間、コミュニケーションをキーワードに「メディアとしての博物館」の未来のかたちを語り合う。
日時　3月8日(土)13時30分～17時(13時開場)
9日(日)9時30分～17時(9時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員400名)
趣旨説明　宮前知佐子(本館 助教)
言語　日英同時通訳
日本語―日本手話通訳あり
主催　国立民族学博物館
【申込期間】　3月5日(水)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員500名)。詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先
museum22@minpaku.ac.jp

年始の開館のお知らせ

年始は1月5日(日)から開館します。

国立民族学博物館 広報係
電話　06-6878-8560(9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form/

本の紹介

オセアニア文化事典編集委員会 編
『オセアニア文化事典』
丸善出版　26,400円(税込)

本事典では、オセアニアの人びとの多様性を重視しながら、重要な史実や出来事などを押さえたうえで「文化」について多様な側面を意識した章立て・項目立てを試みています。執筆陣は官公庁、国際機関、企業、大学・研究機関などからフリーのアーティストまで多岐にわたります。

松本雄一 著
『アンデス文明ガイドブック』
新泉社　1,980円(税込)

アンデス文明の全体像を最新の知見を交えて平易に描き出しています。多くの研究者のご厚意で、貴重な写真を多数収録することができました。豊富なカラー図版によってビジュアル面からもアンデス文明への理解を深めることができます。

みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)
参加無料

第553回
1月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
ヨーロッパの多神教世界
――魔女、女神、ドルイド
講師　河西瑛里子(本館 助教)

ヨーロッパではキリスト教到来以前の信仰への関心が高まっています。この多神教で自然崇拝的な「ペイガニズム」のうち実践は多様ですが、イギリスで特に盛んな魔女術、女神運動、ドルイド教を取り上げます。歌に合わせて、思いっきり自由に体を動かすワークショップ付き。打楽器のご持参大歓迎です。

第554回
2月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
道具資源としての植物利用
――バスケタリーから考える
講師　上羽陽子(本館 准教授)

人類はどのように植物を採取・加工・利用し、用具や器物をつくってきたのでしょうか。バスケタリー製品の編み材・結束材に注目し、道具資源としての植物利用について考えます。

編み材や結束材となるタラバヤシの未展開葉(2023年、西ティモール)

【お知らせ】
1月のみんぱくゼミナールより事前申込制を廃止します。参加希望の方は、当日直接会場へお越しください。また、事前申込制の廃止に伴い、開場時間が13時からとなります。

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

本館の研究者が「みんぱくの展示資料」「調査している地域(国)の最新情報」「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。

会場　本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※ 申込不要、要展示観覧券(一般580円、イベント参加費は不要)

1月26日(日)14時30分～15時
シーア派の殉教語り
話者　黒田賢治(本館 助教)

2月9日(日)14時30分～15時30分
欧米の博物館におけるアフリカ資料
話者　飯田卓(本館 教授)

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先　国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)
電話　06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp　https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第556回　1月11日(土)13時30分～15時
『アイヌ通史』にみるアイヌ史研究の課題と展望
講師　マーク・ウィンチェスター(本館 助教)
会場　本館2階第5セミナー室(定員70名)

第557回
2月1日(土)13時30分～15時
GHQによる神楽台本の検閲
講師　鈴木昂太(本館 助教)
会場　本館2階第5セミナー室(定員70名)

1945年に戦争が終わると、日本を占領した連合国最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)は、通信・出版・放送・芸能にわたる幅広い分野で検閲を実行していました。中国地方の神楽には、実際に検閲を受けた台本が残されています。こうした検閲はいかにおこなわれ、その結果神楽の伝承にどのような影響が生じたのかについて、芸北神楽の事例を中心に考えていきます。

会員交流のための企画
中牧理事長のオンラインサロン

日時　1月19日(日)13時30分～15時
新しい年を迎えたこの機会に、中牧理事長を囲んで、おしゃべりを楽しみませんか？理事長のミニレクチャーも予定しています。
【申込期間】　1月15日(水)まで(事前申込制)

第87回 体験セミナー

万博からみんぱくへ
――そして、もうひとつの万博へ
日程　1月25日(土)13時～16時
講師　吉田憲司(本館 館長)
会場　太陽の塔ほか
【申込期間】　1月10日(金)まで(事前申込制)

石像（鳥女）
標本番号｜H0031134
地域｜リベリア共和国
展示場｜非公開

✦ 推しコレポイント ✦

五本指の足から、鳥が女性に憑依（ひょうい）している様を彫っていて、いかにも「鳥の女」という感じでチャーミングです。左腕の貝殻のアクセサリーが、女性らしさをより強調するワンポイントになっています。

推しコレ図鑑

鳥の女

木場 貴俊（きば たかとし） 京都先端科学大学 准教授

ウブメがいた!!

この石像は、2019年の特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」の図録によれば、空を飛翔できる女性の魔術師を象ったものという。鳥の頭を被り、背に翼が生えた異形を初めて見た瞬間、「あ、ウブメだ」と思った。

そう、わたしは長年ウブメという日本の化物を研究している。「産女」などと書くウブメは、出産で死んだ女性が化けたもので、夜中に赤子を抱いてあらわれ、通行人に子を抱くように強要し、その抱いた子は重くなるという。

だが、ウブメが鳥となんの関係があるのだろうか。じつは、同じく出産で死んだ女性が化けた中国の怪鳥「姑獲鳥」とウブメが、江戸時代に同一視されたからである。ただし姑獲鳥は、子どもを攫う、また毒の血を衣服に付けて子どもを病気にするなど、ウブメと正反対の行動をする悪鳥である。出自は同じでも性質が異なる両者が混在する、その多面的なところがウブメの魅力である。

そんな姑獲鳥が日本に受容されていく過程で、ふたつの動きが起きる。ひとつは、ウブメを描くとき、白い死装束に腰蓑状の線描（出産時の出血を表現）を基本としているが、そこに鳥の足や翼などを付け加えて姑獲鳥にする場合がある。図の姑獲鳥は、推しの石像に造形が近い。

苗村松軒（なむらしょうけん）『御伽人形』（1705年刊、国文学研究資料館所蔵）より、射止められた姑獲鳥

ウブメドリを探して

もうひとつは、日本で姑獲鳥を「発見」しようとした動きである。福岡藩主の黒田斉清による『本草啓蒙補遺』（19世紀前半成立）には、福岡の鞍手郡と志摩郡の村に毎年やって来る、頭が美女で、木の枝に引っかかるほど長い髪の小型の鳥、また並木定恒『妖怪門勝光傳』（1816年成立）でも、頭が女で体が鳶、乳房が長く垂れて髪をふり乱している鳥が、姑獲鳥に類するものとして紹介される。ただし、中国の姑獲鳥に人面の要素はない。姑獲鳥には「ウブメドリ」という和名がよく当てられているが、上記の人面鳥は、姑獲鳥ではなくウブメドリという名前の方がしっくりくる。

人面鳥・半人半鳥は、迦陵頻伽、ハルピュイア、セイレーンなど世界中に見られる。石像の正体はよくわかっていないが、その得体の知れなさが多面的な化物のウブメにどことなく通じているのかもしれない。

横田正臣の「古代への情熱」

ヨコタ博物館（愛知県新城市）

中村 真里絵（なかむら まりえ）　愛知淑徳大学 助教

山深い奥三河地方に行って驚いた。まさか日本のこんな山奥に、タイ東北部にある世界遺産、バンチェン遺跡から出土した土器がこんなにあるとは思わなかったからである。

それはヨコタ博物館でのこと。横田正臣（よこた まさおみ）（一九二五～二〇〇二年）氏が一九六〇年代から、なんと三〇〇回以上も東南アジアへ渡航して収集したコレクションを展示する私設博物館である。クリーム色の地に赤褐色の彩文を施したバンチェン土器のほか、日本でも桃山時代から「宋胡禄（すんころく）」として知られてきたタイのサンカロク陶器、少数民族の衣装などもある。

横田正臣とはどのような人なのか、興味が湧く。彼は十代から働き始め、豊橋市でスーパーの経営者として成功した。四〇歳を機に自分の人生を見つめなおして事業を整理し、東南アジアへ渡航するようになった。一九六九年、ラオスの首都ヴィエンチャンで得体のしれない人物から三点のバンチェン土器を購入した。帰国して研究者からお墨付きをもらうと、これまで築いた財を元手にバンチェン土器をはじめとする考古資料の収集に情熱を注いだ。今日では考古遺跡からの出土品の売買は禁止されている。だが、一九七〇年代は古美術商がこぞって考古遺跡からの出土品を買い求めた。

ヨコタ博物館外観。庭に転がっている糞から、夜間に来館するシカの多さが窺われる（2022年）

その結果、アメリカやヨーロッパ、そして日本へとそれらは流出することになった。こうした現状を目の当たりにした正臣氏は、貴重な出土品が散逸するのを防ごうとした。同時に多くの人に見てもらおうと一九七四年に博物館まで建ててしまったのだ。

とはいえ、個人の趣味で集めたにしては、あまりにも膨大な数の資料である。彼を収集へと駆り立てたのは何だったのだろうか。残された手記や日記も少なく、その思いをくみ取ることは難しい。現在は息子が二代目館長として博物館を引き継いでいるが、博物館の今後や資料の行く末に頭を悩ませている。わたしは正臣氏の遺志を汲（く）んで、他の研究者らと共同で収集資料をデジタルアーカイブ化する事業を民博で始めた。

愛知県の静かな山のなかで東南アジアでの膨大な収集品を見ながら、故人の情熱に思いを馳（は）せてみてはいかがだろうか。

上：正臣氏を収集へと駆り立てたバンチェン土器（2024年）
下：収蔵庫の内部。今年8月から資料整理を始めた（2024年）

JR飯田線新城駅から1日3本のバスがある。駐車場があるのでマイカーでの来館がおすすめ。
ヨコタ博物館公式サイト　https://www.yokota-museum.jp/

自転車が刻むケニアのリズム

萩原（はぎわら） 卓也（たくや）
東洋大学 助教

眼下に広がるサバンナ（ケニア マサイランド、2017年）

自転車に乗る、というありふれたはずの移動も、ケニアでは新鮮である。眼の前に広がるサバンナに、道は無限大。「どこを走ってもいい」。ひとたび踏み出せば、まるで、大地も風も暑さも匂いも独り占めしているようだ。クルマの轍（わだち）をたどるのもよし、けもの道に誘われて進むのもよし。トゲトゲの植物や岩を避けながら、大地と一対一で会話するかのように、大地とリズムを刻みながら、転がっていく。

街なかのリズムは少し異なる。歩行者、リヤカー、バイク、日本よりもほんの少し（？）威勢の良いクルマ、のっそりと動く大型トラック。路肩には石がにらみをきかせて、道路には穴が口を開けて待っている。牧畜民に連れられたウシやヤギの群れが道をふさいでいることもある。それらとおたがいにリズムを整えながら、自転車を走らせていく。そのリズムは一風変わった独特の魅力に満ちている。

ケニアで自転車はバイシィケリとよばれ、それは鉄の黒い塊で、男性の乗り物で、貧しい人が乗るもので、ちょっとした移動や荷物の運搬に使うもの、というのが共通認識であった。近年では、環境意識や健康意識の高まりにくわえ、余暇にお金をかける中間層の増加も手伝って、健康づくりや気分転換のために自転車にまたがる人が増えている。普段はナイロビのオフィスで働く若い女性が、休日にスポーツタイプの自転車でサイクリングを楽しんでいる姿を見るのも、めずらしい光景ではなくなってきた。

スポーツタイプの自転車を新車で購入できる店舗は少なく、また値段も高いため、ケニアでは状態の良い中古車が人気である。そんな中で、日本からはるばる海を渡ってやってきた中古自転車たちをよく見かける。なぜそんなことがわかるのか。自転車のフレームに防犯登録シールが貼られたままになっているからだ。もしかしたらみなさんのむかしの相棒も、今ごろケニアで、あらたなリズムを刻んでいるかもしれない。

自転車のイベントには、老若男女、じつに多くの人が集まるようになった（ケニア ドゴト付近、2024年）

だって調査だもの

ユニフォーム効果

稲澤努（いなざわつとむ）　尚絅学院大学　准教授

来てまだ三日なのに

二〇二四年七月、調査で博物館へ移動するため、台湾の田舎の港町でバスを待っていた。一日数本しか来ない田舎のバスなので、乗り遅れるとえらいことになる。そのため、少し早めに停留所に行って待っていた。目の前に立派な車が止まり、運転席のご婦人が声をかけてきた。「どこ行くの？　頭城（とうじょう）？」「えーと、（頭城の手前の）蘭陽（らんよう）博物館です」「あら、じゃあ乗りなさいよ」というわけで、博物館まで送ってもらった。

この土地への訪問は二回目だが、初回は地区代表などへのあいさつだけの短い滞在だったので、知り合いは少ない。彼女はなぜわたしに声をかけたのか？「あなた、昨日、媽祖（そ）（女神さま）の写真を撮っていたでしょ。わたしたちの廟（びょう）の服を着て」。

そう、昨日はここの地区の媽祖廟と関係のある、地区外の廟の神々を連れてくる行事があった。わたしは、廟代表にもらった黄色い服を着て、神様を迎える一行についてまわったのだった。車内で話を聞くと、彼女は廟代表の弟の妻で、昨日の行事で写真を撮るわたしを見かけたのだという。同じ服を着ているだけで、来てまだ三日なのに地元の人のように見え、仲間として扱われる。「ユニフォーム」の効果はデカイ。

媽祖廟の服を着る筆者（右）（台湾 宜蘭県、2024年、廟の関係者撮影）

とりあえず現地になじむ

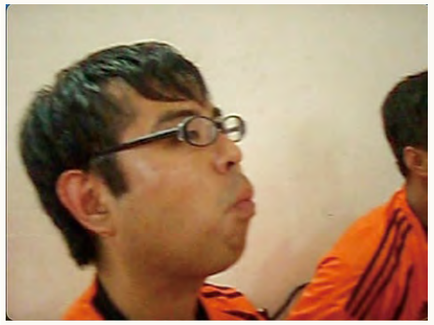
思い返せば約二〇年前、大学院生として初めて中国・広東省汕尾（さんび）の漁村で長期調査を始めたばかりのときも、「現地の人と同じ格好」をしたことがある。当時、年配の女性たちを中心にした「拝神組」が、毎日のように廟に出かけ参拝と奉仕活動をしていた。そこに同行したら、お前もこれを着て拝め、という話になったのである。とりあえず仲間に入れてもらったと思い「なかなかいい感じの調査の始まりだ」と日本にいる指導教員に意気揚々とメールで報告した。そうしたら「なじむのはいいけど、調査の目的はなじむことではないから」としっかりと研究の方向を定めるように釘（くぎ）をさされたことを思い出す。

ちなみに、現地になじんだと思っていたわたしだが、その数日後、「拝神組」リーダーの老婆に「あなた、台湾人だっけ？　アメリカ人だっけ？」と聞かれてかなりびっくりした。そこで「日本人」と周りがフォローしてくれたが、「そうか。日本はここから車で何時間だい？」と聞きかえされ、まだまだ自分がまったく知らない世界観があることを思い知ったのだった。

上：廟で神に祈る拝神組
下：拝神組と同じ格好をする筆者
（中国 広東省 汕尾、2006年、拝神組若手撮影）

途中から「もう知らん」

こんなこともあった。同じ村のドラゴンボート祭りの打ち上げのときのことだ。わたしはボートには乗らなかったが、同じユニフォームを着て宴会に参加した。この宴は大変盛り上がり、酔っ払った地区幹部の青年にカメラをとりあげられ、好き勝手に動画を撮られた。動画は電池を食うので無駄遣いは「やめてほしいなぁ」と思ったが、途中から「もう知らん」と開き直った。同じ格好をしているせいか、みないつも以上にフレンドリーで、どんどん酒を注がれた。もちろん、それをことごとく飲み干すわたし……。というわけで、この日の宴会の記録は、途中からほとんどない。残ったのは、盛り上がった、たくさん飲んだという記憶だけである。伝統文化と彼らの日常について聞きたかったのだが、まあ仕方ないのだ。だって調査だもの。



右：酔っ払った現地若手幹部に撮られた動画に映る筆者
左：龍船レースを終え、宴会場にむかう漁村龍船隊
（漁村の若手幹部撮影）
（どちらも中国 広東省 汕尾、2010年）

行く国々で「肝だメシ」

キャサリン・バトラー　カーディフ大学 准教授

わたしは子どものとき、すごく好き嫌いが多かった。しかし大人になるにつれ少しずつ食べられるものが増え、たぶん今では平均的な西洋人よりいろいろな食べ物を楽しんでいると思う。これまでわたしは文学研究者としていろいろな国を訪れいろいろな料理を食べてきた。初めて日本に来たのは50歳を超えてからなのだが、それまでに、各国で食にまつわる恥ずかしい思いも、誇らしい思いもしてきた。以来10年、イギリスの児童文学と日本文化の関係を研究するため、ほとんど毎年日本に通っているので、日本料理の種類にも文脈にもだんだん慣れてきた。

それぞれの国の料理は独特な味や食感を含んでいる。たまに、外国人観光客はビックリするような食べ物を半ば強引に供され、その反応を観察される。例えば、アイスランドでは強烈に臭う発酵サメ肉「ハウカット」を笑顔で食べなければならなかった。わたしも勇気がありそうな外国の友人にときどきマーマイトのサンドイッチを渡す。この酵母の副産物からできたとてもしょっぱいペーストをイギリスではパンに塗るのだが、究極に大好きか大嫌いかの反応を刺激させる能力をもつことで有名だ。

日本も同じだ。納豆を初めて食べたとき、日本の友達がじっとわたしを見ていることに気づいた。ウニの握り寿司や生カキを食べたときも、観察されていることを強く意識した（わたしはウニが大好きだ！）。ウナギ屋で肝が入った汁を食べたとき、ひらめいた、「これが本当の『肝試し』だ！」。

わたしはほとんどの日本の食べ物を楽しめた。しかし、残っている謎がある。その食べ物を食べられなかった場合、日本の友達はがっかりしていたのか、密かに喜んでいたのか。わたしが「おいしい！」と言ったときの彼らの表情ははっきり読めなかったが、自分としてはたしかに得意な気持ちであった。食べ物は友情を支えるが、ときには争いも招くものなのかもしれない。人は意地っ張りでもあるので、食をめぐって展開される心理現象も面白い。

肝試しに臨むわたし（神奈川県小田原市、2023年）

月刊みんぱく 2025年 1月号

第49巻第1号通巻第568号　2025年1月1日発行

編集·発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　山中由里子
編集委員　樫永真佐夫(編集長)　河西瑛里子
黒田賢治　中川理　奈良雅史　松本雄一
制作·協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　株式会社 研文社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C028818
VEGETABLE OIL INK
GREEN PRINTING JPM P-B10271

『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読
本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。

お問い合わせ

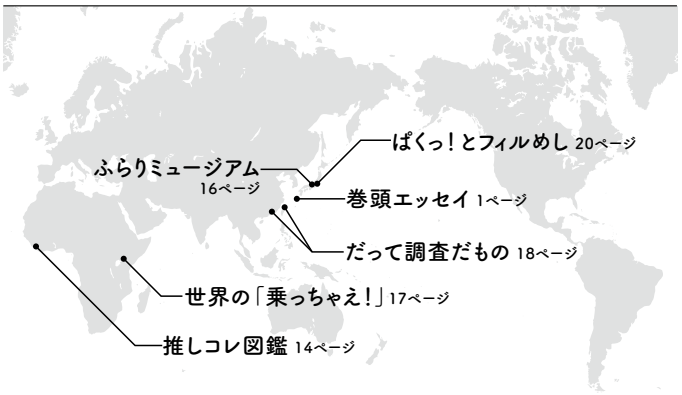
国立民族学博物館友の会
みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。
電話 06-6877-8893(平日9:00～17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会

今月号の地図



編 集 後 記

ベトナムの山間部に住む黒タイ族は十日ごとの昼と夕の食事前、祖霊をまつる家の祭壇に食事をお供えをする。その際、肉料理が不可欠。「ご先祖たちに日ごろの感謝を込めて」というのはタテマエで、動物性タンパク質が不足しがちな農村の食生活で「たまには家族で肉でも食わにゃあ」というのがホンネの制度では、とわたしは疑っている。このように、お供えを信仰に根ざした霊的存在に対する贈与としてみなすなら、そのタテマエとホンネは大きく乖離(かいり)しがちである。だが、「カミだの、あの世だの、祟(たた)りだの、ほんと?」って世になってもお供えがなくなるようすはない。なぜ?ということで本特集。むしろお供えの本質は、絆(きずな)などの感情をモノで可視化したいという、人ならではの欲求にあるのだろうか。もっといえば、人とは「お供え」する動物?　だが、池谷和信さんのお供え発生論からすると、それもちがう???　わからないって楽しい。(樫永真佐夫)

次号の予告 2月号

特集「書なの？ 画なの？」(仮)

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

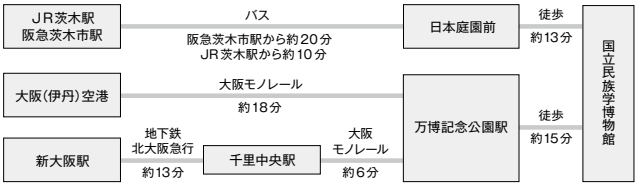
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151

開館時間　10:00～17:00(入館は16:30まで)

休 館 日　毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日～1月4日)

観 覧 料　一般 580円／大学生 250円／高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス
本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/